

ラヴェル《鏡》

1905年の作品。ラヴェルが所属していた芸術家仲間「アパッシュ」の友人たちに各曲が献呈されています。この曲集について、これまでは「鏡に映った対象物を客観的に描写している」というような解釈が主流でしたが、それを覆す、新たな視点で解説をした方がおり、今回はその著者の許可を得て一部引用、参照させていただきながらプログラムノートを作成しました。日本語タイトルの誤訳はラヴェルのクープランのトンボー（以前はクープランの墓、と訳されていた。）では指摘されているものの、《鏡》のタイトルについては大昔の最初の訳がずっと疑われもせず受け入れられてきたのではないかと思います。「鏡」もフランス語ではmiroirs、と複数形です。ラヴェルは敬愛していたフランソワ・クープランの暗号的な標題のつけ方を真似ているのかも知れません。結局は人の心や、人間模様を映し出す「鏡」なのです。

1. 夜に舞う蝶（詩人レオン＝ポール・ファルグに献呈）

「夜に舞う蝶」とすることではじめて娼婦がイメージできる。「蛾」や「夜蛾」と訳されるこの曲は詩人でアパッシュのひとりであったファルグの「納屋の夜蛾は、ばたばたと飛び立ってはほかの梁にとまって蝶ネクタイとなる」という一節に想を得た作品。この「夜蛾」は夜に舞う蝶、すなわち娼婦を暗示しています。ラヴェルにはおしゃべりに行く娼婦の友達がいた事はよく知られており、娼婦に向けるラヴェルの暖かい視線も感じさせます。

2. 悲しき鳥たち（初演者リカルド・ビニェスに献呈）

「夏の、とりわけ暑い日に、暑さで眩み迷い子になった鳥たちの姿。真夏の光も届かない、ほの暗い森の中で動けなくなった鳥たちは、ひっそりと息絶える。(献呈されたビニェスの言葉)」もちろぬ鳥は空を飛ぶ鳥のことではない。前曲での比喩と同じように、都会に住む同時代人が抱いていた孤独感を鳥に見立てて描いたのでしょう。

3. 洋上の小舟（画家ポール・ソルドに献呈）

波+小舟のイメージの源泉は葛飾北斎による富嶽三十六景の「神奈川沖浪裏」である。アルペッジョの波のうねりに小さな船が見え隠れし、海の大波にも身をまかせるしかありません。富士山を背景に、大波に翻弄される3隻の舟が小さく描かれた北斎の浮世絵をもとに作曲されたこの曲も、社会情勢に流されてしまう人々の悲しさ、愚かさ、を描いています。自由で気まぐれな波のようですが、ラヴェルのセンスあるリズムにコントロールされています。

4. 道化師の朝の歌（批評家ミシェル・ディミトリー・カルヴォコレッシに献呈）

ラヴェルは母親からスペインの血をひき、この曲のみタイトルがスペイン語で付けられました。アルボラーダAlboradaは朝の歌と訳されますが、要は「朝帰りの歌」です。生き生きとしたリズムに、ギターを模倣したアルペッジョや連打、重音のグリッサンドと演奏技巧的にも華やかですが、顔で笑って心で泣く道化師の気持ちを歌うような、中間部の情緒あふれる旋律も魅力です。

5. 鐘の谷（作曲家でラヴェルの弟子、モーリス・ドラーージュに献呈）

ラヴェル自身の言葉によると「正午にいっせいに鳴り響く、パリじゅうの教会の鐘の音からインスピレーションを得た」。鐘＝人の心または人間そのもの。重なりあい、響きあう鐘の音は人と人との関わり合いの様でもあります。遠近法を使って、長い余韻を伴う様々な鐘の音が並行し、静かな谷に吸い込まれていくように終わります。